2023年度

国　　語

最初に、以下の注意事項をよく読んで下さい。

1．問題冊子は監督者の指示があるまでは開かないで下さい。

2．監督者の指示にしたがって、解答用紙に**受験番号**と**氏名**を記入してください。問題冊子は**受験番号**のみを記入して下さい。

3．試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは、手をあげて下さい。

4．受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出て下さい。

5．問題冊子および解答用紙は持ち帰らないで下さい。

6．字数制限のある問題については、句読点なども１字として数えるものとします。

受験番号	

HJ 2月10日

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一、 次の①～⑥の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを書きなさい。

① 肉や魚をレイトウする。　② 将来をショクボウされている。

③ フキンシンな発言を控える。　④ テレビの音量をシボる。

⑤ 両者の意見を折衷する。　⑥ けが人をタンカで運ぶ。

問二、 次の中から「東奔西走」と似た意味を表すものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア、てんてこ舞い　イ、古今東西　ウ、一難去ってまた一難

エ、南船北馬　オ、悪事千里を走る

問三、 次の（　　）には「うそか本当か分からず判断に迷う」という意味の四字熟語が入る。その四字熟語を漢字で答えなさい。

先生の誉め言葉を（　　）で聞いていた。

問四、 次の（　　）に適切な漢字二字を入れ、慣用句を含む文として完成させなさい。

① 初戦は相手を圧倒したが、二回戦は（　　）を踏むような勝利だった。

② あの選手は才能があって監督の（　　）にかなった。

HJ 2月10日

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔離島に暮らす小学三年生の颯太（そうた）は、本島の高校に通ういとこの武（たけし）兄ちゃんの帰りを、夏休み中ずっと待っていた。農園を継ぐと約束して島を出た兄ちゃんは、船の設計をしたいから大学に進学するつもりだと颯太にだけ打ち明けていた。兄ちゃんは帰ってこないが、隣の高橋家に颯太と同い年の孫娘、ユリが東京からやってきた。母親が海外出張のため、祖父母の家に預けられたのだ。最初はつれなかったユリだが、野良猫（のらねこ）に驚いて上げた悲鳴や拙いバイオリンの演奏を聞かれた颯太には心を許す。颯太も武兄ちゃんのことを話すなどして、すっかり二人は打ち解けた。ユリが帰る前日、二人でしばしば訪れていたオルゴール店へ行く。ユリはお土産にオルゴールを作ると言う。〕

「颯太も一緒に作ろうよ」

「おれはいいよ。ここに住んでるのに、土産なんか要らないし」

「いいじゃない。記念になるよ」

押し問答になって、颯太はしかたなく正直に言った。

「それに、お金もない」

「わたしが払うよ。ママにお小遣いもらってるから」

ユリはa〜ともなげに言うけれど、そういうわけにもいかない。颯太が困っていたら、店員さんが横から口を挟んだ。

「一個分の代金で、二個作っていいですよ。子ども料金ってことで」

「やったあ。ありがとうございます」

ユリがすかさず礼を言う。まだ少々まごついている颯太に向かって、店員さんはにこやかにつけ加えた。

「それに、こないだ店番もしてもらいましたし」

店番といっても、お客は誰も来なかった。考えてみれば、ここで他の客と出くわしたことは一度もない。その日も例外ではな

く、颯太たちはレジ台のところで雑談していただけだったが、おかげでお昼をゆっくり食べられました、と彼は喜んでくれた。
「いい記念になりますよ。さっき、あなたも言っていたとおり」
店員さんがユリの手もとに目をやった。
「音楽は記憶とつながっていますからね。たとえばこの先、その曲を聴くことがあれば、僕はきっとあなたがたのことを思い出します」
「ほんとに?」
ユリが照れくさそうに微笑(ほほえ)んだ。
好きなアニメの主題歌を、颯太は選んだ。外箱はふたりとも、飾りけのない四角い箱にした。颯太が緑色で、ユリは淡いピンクだ。店員さんはそれぞれの箱に手際(てぎわ)よく器械をはめこむと、テーブルのひきだしからひらたい籐(とう)のかごを出した。
「よかったら、使って下さい」
色とりどりのビーズや、ハートや星のかたちをしたスパンコールや、駄菓子のおまけについてくるようなプラスチックの人形なんかが、こまごまと入っている。接着剤で箱の表面に貼りつけるらしい。
「わあ、かわいい」
貝殻を使うと言っていたユリだが、こちらも気になるようで、かごの中身を物色しはじめた。レースやリボン、ボタンもある。ちょっと女子っぽい感じだけれど、颯太も少し [1] してきた。工作はけっこう得意なのだ。

完成したオルゴールは、ひとまず店で預かってもらうことになった。接着剤が乾ききるまで動かさないほうがいいと店員さんに言われたのだ。テーブルの隅に、颯太とユリはおのおのオルゴールを置いた。
颯太はふたの上いっぱいに、細かいビーズを使って、アニメに登場する戦士を描いた。武兄ちゃんが島にいた頃、プラモデル作りをよく手伝っていたので、地道な作業も苦ではなかった。ユリのほうも力作だ。大小の貝殻をパズルのように組みあわせ、ふたと側面をびっしり覆っている。

「じゃあ明日、午前中に取りに来ます」
ユリが言った。今晩母親が迎えに来て、実家に一泊し、昼には島を出る予定らしい。
「わかりました。お待ちしています」
店員さんに見送られ、颯太たちは家路についた。ガジュマルの木の上に広がる空が、夕焼けの色に染まりはじめている。作業に熱中して、思ったよりも長居してしまった。
おもての道に出たところで、ユリが立ちどまった。
「この、なんにもない景色ともお別れだね。もう見られないと思うと、ちょっとだけ名残惜しいかも」
南ノ浜の方角を見下ろして、感慨深げに言う。
「東京に帰ったら、バイオリンの練習がんばらなくちゃ。お買いものにも行きたいし、映画も見たいし、忙しくなりそう」
大丈夫かな、不安だなあ、とわざとらしく首を振ってみせる。言葉とはうらはらに、見るからに浮かれている。
①颯太は黙って歩き出した。
「今日はママも一緒にごはん食べるんだ。最後の晩餐。おばあちゃんが張りきっちゃって、山ほどお刺身買ってきてた。おじいちゃんもさあ、いつもはママの文句ばっかり言ってるくせに、朝からそわそわしてるの。うれしいんだと思う。自分では絶対に認めないけどね、ほんと素直じゃないよね」
2 喋り続けるユリに相槌を打つ気にもなれなくて、足を速める。お別れだの、最後だの、いちいち言わなくたってわかってる。
「待ってよ」
ユリが小走りに追いかけてきて、颯太の横に並んだ。
「お兄ちゃんに会えなかったのは、残念だったな」
これは口先だけでもなさそうで、唇をとがらせている。
結局、武兄ちゃんはお盆休みにも帰ってこなかったのだ。「なに考えてんだあいつは」と伯父はぶつくさ言っていた。兄ちゃん

HJ 2月10日

がなにを考えているのか知っている颯太としては、いたたまれなかった。
「忙しいもんね。アルバイトと勉強で、夏休みどころじゃないのかも。ま、しかたないね」
颯太もそう思う。ただ、（　I　）の他人に「しかたない」とあっさり片づけてほしくもない。
「そんなに落ちこまないでよ。まだ夏休みは一週間あるしさ。夏休みがだめでも、すぐ冬休みが来るって」
ユリが颯太の背中をぽんとたたいた。励ましてくれているつもりだというのは、颯太にもわかった。わかったけれど、いらつく。
「適当なこと言うなよ。だいたい、お前には関係ないし」
体をひねり、ユリの手を払いのけた。上機嫌だったユリも、さすがに顔をこわばらせた。
「なに怒ってんの？　やつあたりしないでよ。さびしいのはわかるけど、わたしのせいじゃ……」
そこで、唐突に口をつぐんだ。
「なんだよ？」
「あれ、ひょっとして」
思わせぶりに、また言葉をとぎらせる。にんまりと笑っている。颯太は［3］して問い返した。
「だから、なんなんだよ？」
「颯太、わたしとお別れするのがさびしいんだ？」
「は？」
「なあんだ。さびしいならさびしいって、はっきり言ってよ。心配しないで。わたしは颯太のこと忘れないよ。約束する」
ユリが片手を差し出した。
「指きりしよっか？」
颯太はとっさに一歩後ずさった。
「しねえよ」

「どうしたの、顔赤いよ。もしかして照れてる？」
おもしろそうに言われ、かっと頭に血が上った。
「なに言ってんの、ばっかじゃねえの？」
ものすごい大声が出た。
「さびしいわけないだろ。全然さびしくなんかない。ていうか、うれしい。明日からやっと静かになって。ほんと、まじで、うれしすぎる」
②ユリがまばたきして手をひっこめた。
「さっさと東京に帰れよ。言っとくけど、おれはお前のことなんかすぐ忘れるから。明日になったら、もう忘れてる」
ユリはなにも言わない。大きな目を、ますます大きく見開いている。
泣くのか、と一瞬だけ颯太はたじろいだ。ユリは怒っているというより、悲しそうに見えたのだ。
でもユリは泣かなかった。颯太をきっとにらみつけ、口を開きかけ、そして、ふいと視線をそらした。
「ママ！」
颯太を置いて、ユリはいちもくさんに道の先へ駆けていった。

次の日、ユリたちは昼前に家を出ていった。
颯太が自分の目で見届けたわけではない。「忘れものはないか」「おいマミ、これも持ってけ」「そろそろ出なきゃ乗り遅れるぞ」「ほら、ばあさんも早く」などと高橋のじいちゃんがどなる声が、颯太の寝そべっている茶の間まで聞こえてきたのだ。夫婦そろって、娘と孫を港まで送っていくらしい。
隣家が静かになってからも、颯太は起きあがらなかった。③見送りに行くつもりはない。行くもんか。
ぎゅっと目をつぶる。キイ、キイ、と妙な音がする。高くてかぼそい。ブランコのようでも、自転車のようでも、猫や鳥の鳴き声のようでもある。あのときと同じだ。ただし今回は、耳の外側ではなく内側から音が響いてくる。

④颯太はいっそう固く目を閉じた。耳をすます。今にもユリの悲鳴が聞こえてきそうな気がするのに、耳に届くのはかしましい蟬（せみ）の声ばかりだ。

急にばかばかしくなって、まぶたを開けた。聞こえるはずがない。ユリはもういない。

背中を畳からひきはがし、玄関を出た。熱気と湿気がむわっとまとわりついてくる。太った三毛猫が一匹、［4］と高橋家の生垣（いけがき）にもぐりこんでいく。路地を抜けて、診療所の角で足がとまった。左に折れれば、港に通じる下り坂に出る。

行くあてもないまま、右に曲がる。機械的に足を動かす。容赦なく照りつける太陽にあぶられて全身から汗がふきだし、暑さで頭がぼんやりしてくる。人影のない道の行く手に、ガジュマルの大木が見えた。

「いらっしゃいませ」

店員さんはいつもどおりの笑顔で颯太を迎えてくれた。

「きれいに乾いてますよ。今、袋を出しますね」

テーブルに目をやって、颯太はぽかんとした。昨日置いて帰ったふたつのオルゴールは、すでにひとつだけになっている。そこまでは颯太も予期していたとおりだ。

しかし、その箱は緑色ではなかった。

「あの、これ、ユリのじゃ……」

ビーズではなく貝殻で覆われたオルゴールを、颯太はおずおずと指さした。店員さんがいぶかしげに首をかしげる。

「ええ。交換することにしたんですよね？」

そうすれば次に会うときまでお互いのことを忘れずにいられるから、とユリは彼に説明していたそうだ。

⑤「名案だなって思ったんですけど、じゃあ……」

最後まで聞かずに、颯太は店から駆け出した。

わたしは颯太のこと忘れないよ、とユリは約束してくれた。それなのに颯太は、お前のことなんかすぐ忘れる、とはねつけた。ばっかじゃねえの、と悪態までついた。

HJ 2月10日

ばかは、どっちだ。

全速力で来た道を戻って、路地の奥へと駆けこんだ。門の前に停めてあった自転車に飛び乗る。じきに船の出航する時刻だ。これから港まで走っても、船出にはまにあわない。となると、めざすべき行き先はひとつしかない。

島の北端にあたる北ノ岬からは、本島に向かう船がよく見える。武兄ちゃんに教わった。兄ちゃんが本島に戻るとき、颯太はまず港で見送った後、自転車で海岸沿いを岬まで飛ばして、もう一度船に手を振ることにしている。運がよければ、豆粒ほどの大きさではあるものの、デッキで手を振り返してくれている兄ちゃんの姿も見える。

わたしは颯太のこと忘れないよ。

夢中でペダルをこぐ颯太の頭の中で、確信に満ちたユリの声音が回っている。⑥同じ旋律をいつまでも繰り返し奏でる、オルゴールみたいに。

岬まで下るまっすぐな坂にさしかかったとき、左手にそびえる崖の向こうから、小さな船影が現れた。

「ユリ！」

ありったけの力をこめて叫ぶ。ちかちか光る海がまぶしすぎて、船のデッキに誰かいるかはよく見えない。もし見えても、それがユリかはわからない。もしユリだったとしても、こんなに遠くから声が届くはずもない。

「ユリ！」

一直線に自転車を走らせながら、それでも颯太は叫び続ける。白い航跡を残して遠ざかっていく船に向かって、何度でも、声を限りに叫び続ける。

（瀧羽麻子『ゆびきり』〈幻冬舎〉より）

HJ 2月10日

問一、 1 ～ 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じものは使えない。）

ア、いらいら　イ、のそのそ　ウ、ひやひや　エ、わくわく　オ、ふわふわ　カ、べらべら

問二、 波線部**a**・**b**の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a「こともなげに」

ア、大人びたようすで
イ、平然としたようすで
ウ、誇ったようなようすで
エ、興味のないようすで
オ、無神経なようすで

b「いちもくさんに」

ア、あっという間に
イ、方向転換をして
ウ、気持ちを新たに
エ、動揺を隠しながら
オ、わき目もふらずに

問三、（　I　）に入ることばとして適切なものを漢字一字で答えなさい。

問四、 傍線部①「颯太は黙って歩き出した」とあるが、その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、言葉と表情を一致させないユリの態度が気に障(さわ)り、これ以上ユリと関わるべきではないと思ったから。
2、東京でのユリの過ごし方についてはまったく想像できないので、ユリに返せる言葉が見つからなかったから。
3、帰ってからのことをユリが楽しそうに話すので、自分の気持ちが置きざりにされているように感じたから。
4、ユリとはもう会えないという事実をつきつけられ、今の時間の過ごし方をじっくりと考えたかったから。
5、実際にはユリは別れを惜しんでいるのだとは思うものの、どんなことを言うべきかわからなかったから。

問五、 傍線部②「ユリがまばたきして手をひっこめた」とあるが、ユリがどのような理由で手を差し出していたのかについて説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は五字以内で、【 2 】は五字以上十字以内でそれぞれ文中から抜き出しなさい。

二人のこれからの関係について【 1 】をして、颯太に【 2 】ほしいという思いを伝えるため。

問六、 傍線部③「見送りに行くつもりはない。行くもんか」とあるが、颯太のこの気持ちが変化したことが行動に表れている一文を文中から探し、初めの五字を抜き出しなさい。

問七、 傍線部④「颯太はいっそう固く目を閉じた」とあるが、このときの颯太の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、何かに悩まされることもなく眠れたらいいのに、という気持ち。
2、いつかまたユリが隣家に戻って一緒にいられればいいのに、という気持ち。
3、蟬以外の音など聞こえなくなってしまえばいいのに、という気持ち。
4、ユリのことをすっかり忘れてしまえたらいいのに、という気持ち。
5、ユリと気まずい関係になる前の状態に戻れたらいいのに、という気持ち。

問八、 傍線部⑤「名案」とあるが、どうすることが「名案」なのか。「〜こと。」に続くように三十字以内で書きなさい。

問九、 傍線部⑥「同じ旋律をいつまでも繰り返し奏でる、オルゴールみたいに」とあるが、ここから読み取れる颯太のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、ユリの言葉を信じようとしなかった自分がばかだったとわかり、深く反省している。
2、悪態をついてしまったけれども、ユリは自分の本心を理解しているにちがいないと確信している。
3、もう二度とユリには会えないと予感し、自分もユリを忘れないという思いを強くしている。
4、約束を破ることは絶対にしないというユリの思いを今になって感じ取り、やるせなくなっている。
5、オルゴールに込めたユリの思いにようやく気がつき、感謝で胸がいっぱいになっている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ハードな書きことば」「話しことば化した書きことば」を両極としてとらえるといいのではないかと述べた。「ハードな書きことば」にもいろいろありそうだが、その一つの極は「専門家」による「書きことば」であろう。それは学術書や論文をかたちづくる「書きことば」だ。そしてそれは日常的な言語空間にはあまり姿をあらわさない。**1** 多くの人に無縁の「書きことば」であろう。しかし大学生にとっては無縁ではないはずで、まずは大学の教育の中で、もっとも「ハードな書きことば」を修得する必要がある。もっとも「ハードな書きことば」が身につけば、あとは「ハードさ」を調節すればよい。そもそも大学とはそういう場であったのではないか。人文学系の学部は必要ないというようなことが喧伝[注1]されるようになった。卒業論文を書いて大学を卒業するという、かつては当然だったことが当然ではなくなっている現在、大学教育のどこかでもっとも「ハードな書きことば」を修得するトレーニングがあってよいだろう。当然もっとも「ハードな書きことば」を自身が書くためには、もっとも「ハードな書きことば」を読むことになる。

2、大学生ではない場合は、どうすればよいだろうか。いわゆる「ベタな」方法にみえるかもしれないが、「学術書」もしくはそれにちかい本を読むということがありそうだ。大学生であれば、自身の専門外の「学術書」を読むということだ。大学という場においては、筆者が大学生の頃には、「教養」と「専門」とが分かれていた。まず広く「教養」を身につけるための「一般教育」という科目群があった。学生にはあまりその意味合いはわかっていなかったかもしれないし、必ずしも効果的な授業運営がなされていたとはいえないかもしれない。しかしとにもかくにも、そういうカテゴリーがあった。大学の外では、新書や選書がそういう働きをしていた。教養のための新書、選書といった【 X 】が強かった。

筆者も高校生ぐらいから岩波新書を読み始め、いろいろな分野のことを知った。高校を卒業する頃に岩波新書の「黄版」[注2]が出版され始め、「青版」[注3]に馴れていた目からは新鮮でもあり、また「内容」も新鮮であった。その頃は教養のための新書や選書は身のまわりにたくさんあった。

現在も新書や選書はそうした位置付けであろうが、ここでも「わかりやすく」が第一義的に追求されるようになっていると感

じる。まず「内容」があって、それを「わかりやすく」書くということであればまだいいが、「内容」がよくても、「内容」の複雑さのために「わかりやすく」なりにくいとなると、企画としては「没」になる。古典文を引用するなら必ず現代語訳、漢文は書き下し文で、注は使わない、となってくると、過去の日本語を話題にすること自体が難しくなる。かつての「書きことば」を分けるとすれば、やはりもっとも「ハードな書きことば」は学術書、論文をかたちづくる「書きことば」であろう。それは現在と同じだ。もう一方の極には、「日常的な言語生活におけるごく一般的なソフトな書きことば」があったとすると、その中間の「ハード」寄りには、新書、選書のような「書きことば」があったはずだ。この「新書、選書をかたちづくるセミハードな書きことば」が「ハード」と「ソフト」とをつなぐ「ブリッジ」のように存在していたことによって、「ハード」「セミハード」「ソフト」がそれぞれの「エリア」を確保していた。そして「エリア」が確保されているということは外側からもそれが見えやすいということでもある。「中間」や「ブリッジ」がなくなることによって、かえって、「極」が消失しているのではないか。

教養のための新書、選書を読むということと、専門外の学術書を読む、ということを自身の「書きことば」の強化のための方法としてあげた。そのこととかかわって、「書きことば」を精密に読む、という方法もありそうだ。「古典を読む」ということも一つの方法として考えることができる。「古典」と呼ばれるa ような書物の場合、これまでの「よみ」が蓄積されていることがほとんどであろう。そうしたものを頼らずに自身で読む、ということはもちろんいい。これまでの「よみ」を「ガイド」にして読むのもいい。「古典」と呼ばれるような書物は現在書かれたものではないことがほとんどで、場合によってはギリシャ時代に書かれた、というようなものもある。「書きことば」は時空を超えるためにある、と述べたが、どれだけ「時空を超えているか」を実感することができる。日本語以外の言語で書かれた古典を日本語で読む場合には、「翻訳」すなわち異言語間の置き換えということについて考えることもできる。日本語の古典、ということでいえば、日本語が変化してきたということを実感することができる。『源氏物語』をそのまま理解できる人は少ないだろう。辞書を引いたとしても、まだ難しそうだ。大学で『源氏物語』を一生懸命学びました、と就職活動の面接で言ったとしても、「我が社は君のような人材を求めていたんだよ」とはならないだろう。がんばったことが尊いのだという「みかた」もあるかもしれない。③現代の日本において『源氏物語』を学ぶことの意義を説明するのは案外難しい。しかし、もっとも「ハードな書きことば」ということからすれば、古典はその「極北」にあるともいえよb う。言

HJ 2月10日

語面では最上級の「ハードな書きことば」を読むということだろう。日本語ではあるが、自身が知らない日本語があることに気づき、そのことによって、現代日本語は相対化される。「相対化」は自身が絶対ではないということで、これもキーワードの一つといってよい。「内容」についていえば、「共感できること／共感できないこと」だろうか。

時空を超えるということは「今、ここ」ではない、ということでもある。「今、ここ」が最優先されることが多い時に、非＝「今、ここ」はそれだけで大事だともいえる。「今、ここ」が突然出現したのではなく、「今、ここ」に至る【 Y 】がある、ということを意識することは大事だ。それは「歴史」を意識することでもある。そして「歴史」を意識するということは、「事実」には必ず人間が関与しているということを知ることにもつながる。 **3** 、しらずしらずのうちに自分が属している時空の「現在」の価値観によって、すべてを推し量ろうとしていることも、非＝「今、ここ」とふれることによって気づく。「現在」の相対化、自身の価値観の相対化はどうしても必要なことであろう。人間は個人が具体的に経験してきたことに基づいて判断をする。それは「必然」であるが、少なくとも④自身がありとあらゆることを経験しているわけではないということはいつも意識しておく必要がある。相対化はつねに「カウンターオピニオン」があるということを意識することでもあるし、自身の言説についていえば、反証可能性(falsifiability)[注4]が確保されているということでもある。「カウンターオピニオン」は馴染(なじ)みがないかもしれないが、医療の分野における「セカンドオピニオン」は広く知られているだろう。

そうであるから、筆者が本書で述べていることも、もちろん筆者の限られた経験の中で述べているに過ぎない。異なる価値観、異なる判断はもちろんあるはずだ。大事なのは、まずは異なる価値観、異なる判断があることを認めること。次にはその異なる価値観、異なる判断にまずは耳を傾けることであろう。受け入れられないことは誰にでもある。これは受け入れられないな、という判断はあってよいが、自身がいつも絶対に正しいとは思わないほうがいいだろう。

序章においてまず「他者に伝えたい情報」があり、それを言語化するというモデルを示した。そこでは説明しなかったが、筆者は「他者に伝えたい情報」には、あまり感情を含まず、他者に伝えやすい「ことがら情報」と、おもに発信者の感情、感覚にかかわり、他者に伝えにくい面をもつ「感情情報」がある、というモデル[注5]を考えてきた。

もちろん「ことがら情報」と「感情情報」が（ **I** ）択一的に截然(せつぜん)と分かれるはずはなく、「ことがら情報」には情的な「感情

情報」が含まれていることが自然であろう。⑤伝統的な和歌、俳諧、現代の短歌、俳句、現代詩は「感情情報」の「純度」がたかいといってよいが、それでも「ことがら情報」的なものが含まれているから、読むことができる、という面もあるだろう。

中学校、高等学校の教科書に和歌、俳諧、短歌、俳句、現代詩が載せられている。したがって、教育の場で「感情情報」を盛る「器」である「詩的言語」が採りあげられていないわけではもちろんない。しかし、多くの人にとって、高等学校卒業後は、「詩的言語」は「遠い」ものになってないだろうか。短歌、俳句を作っている人は少なくない。そういう方々は、ずっと「詩的言語」とともにあるといってよい。ここでは短歌や俳句、現代詩の実作者ではない人も「詩的言語」を丁寧に読む、ということを試みるといいのではないかということを述べておきたい。

まず、感情や感覚がどのように言語化されているかということを丁寧に探ることによって、感情や感覚も言語化できるということが実感できる。「書きことば」ではいかにも難しそうであるが、それができるということを知ることは大事だ。そして、感情や感覚をあからさまに、つまり直接的に表現しなくても表現できることを知ることも大事だ。

4、恋人に会いたいと直接的に言語化するのではなく、恋人の家が見たいと言語化する。むしろその、直接的にあからさまに言語化しないというところに詩的言語の要諦[注6]があるといってもよいだろう。「ありのまま」を言語化するのではない言語化があることを知ること、そして、そうした「非ありのまま言語化」によって伝えられる「情報」は少なくないことを知ることは重要だ。

小学校や中学校においては、「詩的言語」をひととおり「鑑賞」すると「それでは実際に作ってみましょう」となることもある。しかし、日本の短歌、俳句は「定型詩」であり、だからおもしろいという面もあるが、情報を「圧縮」して表現する必要がある。言語量に制限なく「情報」を言語化することと比して、だいぶ難しい。

問いとしては「作者はどう感じていたでしょう」となるかもしれないが、大事なのは、それをどのように言語化しているか、というところだ。作者の気持ちを想像することが目的ではなく、その想像される作者の感情や感覚がどのように言語化されているかを探るところにある。そのことによって、言語の機能、言語が感情や感覚までも表現できるということをある程度にしても実感することができるはずだ。

今必要なのは、「情報」とそれを言語化した「言語表現」をセットにして、「情報」がきちんと言語化できているか、ということを丁寧に吟味することであろう。そのためには、「≪　A　≫」を丁寧に読む、精読するということが必要だ。自身の言語運用能力でどこまでが理解できて、どこからが理解できないか、それを理解することが重要になる。注7コピーの文体にまどわされず、「注8キャッチー」であることにふりまわされず、そうしたことをやってみるのが大事だ。

（今野真二『うつりゆく日本語をよむ―ことばが壊れる前に』〈岩波書店〉より）

注1・喧伝……盛んにいいふらすこと。
注2・黄版……岩波書店から刊行されている新書のうち、一九七七年から刊行されたもの。
注3・青版……岩波書店から刊行されている新書のうち、一九四九年から刊行されたもの。
注4・反証可能性……ある理論が、実験や観察によって否定されたり批判されたりする可能性があるということ。
注5・截然……はっきりしているさま。
注6・要諦……最も大切なところ。
注7・コピー……広告文、宣伝文、見出し。
注8・キャッチー……人気が得られそうであること。

問一、［1］～［4］に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じものは使えない。）

ア、そこで　　イ、例えば　　ウ、また　　エ、したがって　　オ、では　　カ、なぜなら

問二、二重傍線部**a**・**b**と同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a「れる」

ア、写真を見ると昔のことが思い出される。
イ、あらゆる国からの留学生を受け入れる。
ウ、あと五分ほどで校長先生が到着される。
エ、明るい性格ゆえに弟は誰もに好かれる。
オ、複雑な道ではないから迷わず行かれる。

b「よう」

ア、次の演奏会にはみんなで出場しよう。
イ、母の笑顔はまるでひまわりのようだ。
ウ、きっとこのプレゼントは喜ばれよう。
エ、いままさに日が暮れようとしている。
オ、明日までにこの課題を終わらせよう。

問三、【 **X** 】・【 **Y** 】に入ることばとして適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

X ア、趣　イ、的　ウ、軸　エ、筋　オ、芯

Y ア、インフラ　イ、コミット　ウ、スタンス　エ、プロセス　オ、リリース

問四、（ **I** ）に入ることばとして適切なものを漢字二字で答えなさい。

問五、 傍線部①「そういう場」とあるが、どのような場のことか。「～場。」に続くように文中のことばを二十字で抜き出しなさい。

問六、 傍線部②「新書や選書」について述べたものとして適切でないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、かつてと比較すると、現在はわかりやすいという点がより重視される傾向にある。
2、大学の一般教育の授業の役割を大学外でも果たせるものと位置付けられる。
3、日常のことばと論文上の書きことばの中間のことばが使われていた。
4、新鮮な内容をなるべく多く扱うために、以前は難解な内容も平易になっていた。
5、書きことばに対する理解を深めるために読むとよいものの一つに挙げられる。

問七、 傍線部③「現代の日本において『源氏物語』を学ぶことの意義」とあるが、この意義がどのようなことにあるかを説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は十字で、【 2 】は三字でそれぞれ文中から抜き出しなさい。

【 1 】の存在を認識したり、「歴史」を意識したりすることになるので、現代日本語や自分の価値観を【 2 】できるということ。

問八、 傍線部④「自身がありとあらゆることを経験しているわけではないということはいつも意識しておく必要がある」とあるが、この意識がどのようなことにつながると筆者は考えているか。文中のことばを用いて四十字以内で答えなさい。

問九、 傍線部⑤「伝統的な和歌、俳諧、現代の短歌、俳句、現代詩」とあるが、筆者の考える、これらを学ぶことの意義として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、作者が自分の感情をどのように言語で表現しているかを作品からつかもうとすることで、言語の機能に気づける。
2、書きことばで感情や感覚を言語化できると実感することで、「詩的言語」をひととおり「鑑賞」して楽しむことができる。
3、「非ありのまま言語化」や「情報」を圧縮した表現があるという特徴を知ることで、短歌や俳句などを作れるようになる。
4、自分の感情を言語で表現しようとすることで、言語量に制限のある定型詩のおもしろさが分かる。
5、ことがら情報の中に「感情情報」があるということを理解する中で、「純度」のたかい「感情情報」を読み取れる。

問十、 《　**A**　》に入ることばを、五字で文中から抜き出しなさい。

問十一、 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

1、専門外の「学術書」から学ぶという経験をしてこなかった筆者は、自戒を込めて学び方を詳細に伝えている。
2、大学生にとって、「ハードな書きことば」を身につけるには、自分の専門外の「学術書」を読むのがもっともよい。
3、「古典」を読むにあたり、「書きことば」によって作品がどれだけ時空を超えたものかを感じることが可能になる。
4、『源氏物語』を学ぶことは就職活動で役には立たないが、学問に励んでいることは評価されるべきである。
5、「詩的言語」を扱わない人でも「詩的言語」を丁寧に読んでみることで、自身の言語運用能力を理解するのが大切だ。
6、「ことがら情報」と「感情情報」は明確に分けられないので、伝えたい「情報」は常に正確に伝えられるわけではない。
7、「今、ここ」を意識することで、「カウンターオピニオン」や「セカンドオピニオン」の重要性を深く理解できる。

国語

解答用紙

受験番号	

氏名	フリガナ

得点

HJ 2月10日

【一】

問一 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥

問二

問三

問四 ① ②

【二】

問一 1 2 3 4

問二 a b

問三

問四

問五 1 2

問六

問七

問八

問九

こと。

【三】

問一 1 2 3 4

問二 a b

問三 X Y

問四

問五

場。

問六

問七 1 2

問八

問九

問十

問十一